

カンツォネッタ「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」K.152 の由来

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」K.152 はモーツァルトの死後 1799.2.25 にコンスタンツェがブライトコップフ・ウント・ヘルテル社に送った草稿のリスト^{注1}に含まれていて、同年出版されたものの、自筆譜は行方不明となってしまいました。

鳥代：その出版譜^{注2}ではイタリア語歌詞にドイツ語の訳詞も付加され、リートのジャンルに含まれていたけれど、テオドール・ド・ヴィゼヴァとジョルジュ・ド・サン＝フォワの『W. A. モーツァルト、幼少期から成熟期までの彼の音楽生活と作品』（1912）^{注3}には、カンツォネッタの呼称が使われたのね。ケッヒェル目録、旧モーツァルト全集でもこの呼称です。ただし新モーツァルト全集ではアリアの呼称が使われています。



図1 カンツォネッタ「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」K.152 (旧モーツァルト全集から)

犬輔：1920 代後半のある時点で、サン＝フォワはミスリヴェチェクのオペラ・アリア「私の愛する人よ *Il caro mio bene*」をパリ国立図書館に保存されている 12 のミスリヴェチェクの音楽作品集^{注4}の中に発見し、この曲を基にモーツァルトがクラヴィーア伴奏曲に編曲したものが K.152 だということを突き止めました^{注5}。

鳥代：そして、最近になってこのアリアはミスリヴェチェクのオペラ《アルミーダ》(ミラーノ、1780 のカーニヴァル) の第 3 幕初めにリナルド役 (カストラート) によって歌われているということがリスボンのアジュダ図書館所蔵のスコアの発見によって分かったということです^{注6} (リスボンには 16 のミスリヴェチェクのオペラ作品のスコアがありますが、上演された記録はなく、「音楽家に多額の支払いをするという評判を持っていたポルトガルの宮廷による採用の可能性を期待しての一種の履歴書」として作曲家自身によって送られたという説、王家による音楽の定期的な取得の一環という説があります)^{注7}。



ミスリヴェチェク

図2 ミスリヴェチェクのオペラ《アルミーダ *Armida*》総譜表紙 (アジュダ図書館蔵)



図3 ミスリヴェチェクのオペラ《アルミーダ *Armida*》からアリア「私の愛する人よ *Il caro mio bene*」

犬輔：でもモーツァルトが何故編曲などという非創造的な作業を行ったのか、ミスリヴェチェクのアリアや歌詞の入手経路、編曲の時期なども含め疑問が湧きます。

教授：では諸君たちのためにダニエル・E・フリーマンの最新著作『ヨゼフ・ミスリヴェチェク：イル・ボエモ』(2009 版に資料編 275 頁分を追加した 2022 版)^{注8} およびバオロ・V・モンタナリの『過去の発明』(2017)^{注9} を用意したので、ゆっくり読んで纏 (もつ) れた従来説を解きほぐしてみることを勧める。



フリーマン



モンタナリ

2. 最新の研究成果を解釈する

犬輔：二つの著作を読みました。広範な資料から幾つかの曲を選び出し、それぞれの関連を繋いでいく作業が手に取るように分かり興奮しました。

鳥代：わたしも読んで両者ともが説得力ある論考だと思いました。

犬輔：話を理解しやすくするために作品の成立順に説明を進めていくことにしましょう。

2.1 ミスリヴェチェク《アルミーダ》のリブレット原稿には第 3 幕初めのアリアはなかった

犬輔：著作に入る前に、ミスリヴェチェク《アルミーダ》のリブレットを見ておきましょう。多くの図書館が所蔵しており、オンラインでは三箇所で見覧できるのですが、ローマ国立中央図書館蔵のリブレット^{注10}の第 3 幕第 2 場を調べるとおかしなことに気がきます。55, 56 頁が 2 回出て来るんです。図 4 に 1 回目を、図 5 に 2 回目を示します。

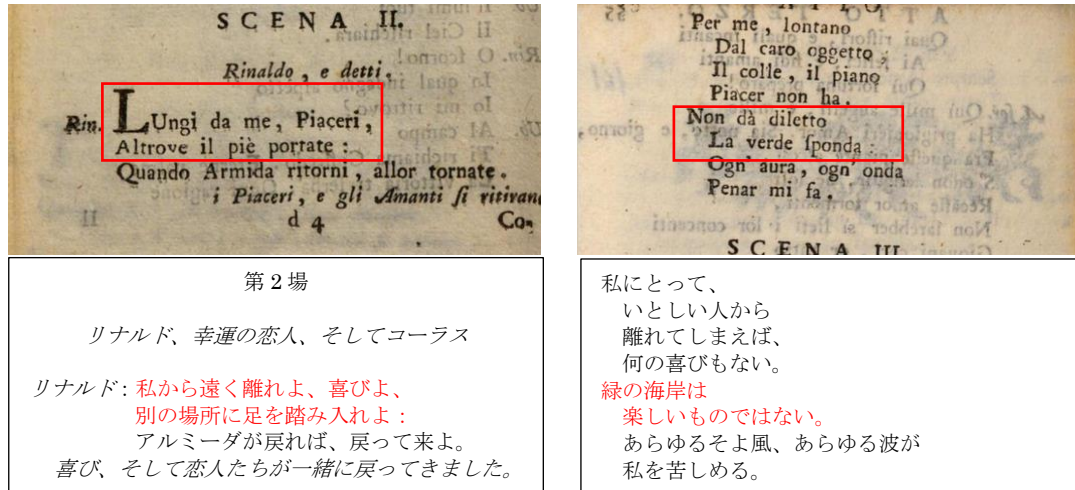


図 4 ミスリヴェチェク《アルミーダ》(ローマ国立中央図書館蔵 55 頁最後と 56 頁最初、1 回目)

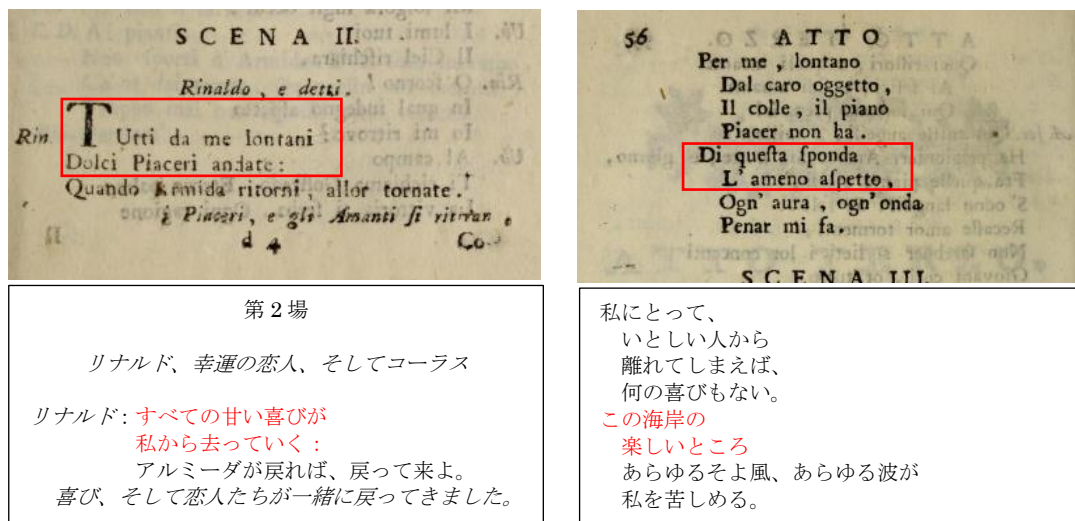


図 5 ミスリヴェチェク《アルミーダ》(ローマ国立中央図書館蔵 55 頁最後と 56 頁最初、2 回目)

鳥代：トロント大学トマス・フィッシャー稀観本図書館蔵やボローニャ国際音楽博物館&図書館蔵のリブレット^{注11}には図 4 の頁はないから図 5 の頁が最終版だと思うわ。

犬輔：ということは科白にもアリアにもリブレッティスト本人による修正が施されたんだね。その結果、捨て鉢なリナルドから吹っ切れたリナルドに変わったんだ。でもアリア「私の愛する人よ Il caro mio bene」はまだ生まれていない。

教授：そのアリアのことは後回しにするとして、この版の前にさらにもう一つ古い版があったであろうことに諸君たちは気づかなかったかね。

犬輔：あっ、55 頁末尾の“呼び合い”が宙に浮いています。元々古い 56 頁の冒頭には Co-で始まる単語があったのを新しい 56 頁に差し替えたときに 55 頁の Co-を Pe-に書き換えることなしにそのままにしているんです。

鳥代：Co-で始まる古い頁はアリアではなく、科白で始まっていたのではないのでしょうか。

教授：つまり元々はリナルドにアリアは与えられていなかったというのが鳥代さんの仮説だね。

2.2 おそらくリナルド役のカストラートのマルケージの要求によりアリアを追加

鳥代：リナルド役のルイージ・マルケージ Luigi Marchesi (1754-1829) はミラーノ出身のカストラート歌手で、モーツァルトとは 1770 年にミラーノで会っています。1776 年にバイエルン選帝侯マクシミリアン 3 世ヨーゼフに仕え、その後選帝侯の没後 (1777.12.30) はイタリアに帰ったといひます¹²。

犬輔：フリーマンによればマルケージはミュンヘンでミスリヴェチェクのオペラ《エーツィオ》(1777) とオラトリオ《アブラハムとイサク》(1777) のタイトル・ロールとして登場し、どちらの場合も並外れた成功を収めました (後者に関してはモーツァルトも 1777.10.11 の手紙で言及)。そしてイタリアではかつて無名の男性ソプラノでしたが、戻ってからはミスリヴェチェク《オリンピーアデ》(ナポリ、1778) のメガークレ役でイタリアでのオペラ・スターとしての地位を確立したとされています。



図 6 ルイージ・マルケージ

鳥代：サリエリ《はじめは音楽、次に言葉》(1786) の上演でアンナ・ストラーチェがマルケージの歌唱法をパロディ化して真似することに成功したという話を覚えているわ。これは《劇場支配人》と併演された日の出来事よ¹³。

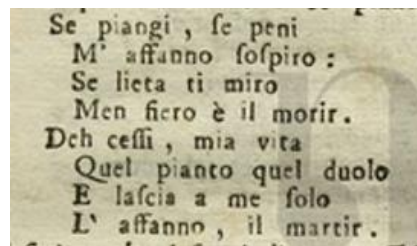
教授：1779 ミラーノでのミスリヴェチェクとマルケージはすでに密接な関係であったということが分かったが、犬輔君がここでさらなる仮説を提起するのだね。

犬輔：はい。マルケージは《アルミーダ》のリブレットの試し刷りを見て、第 3 幕冒頭にアリアがないことから、新たにアリアを追加することを要求したんだと思います。それに応じてリブレッティストが歌詞を追加し、ミスリヴェチェクが作曲したのがアリア「私にとって、いとしい人から Per me lontano」であったと思われます。しかしこのリブレッティストは最後まで歌詞の微調整にこだわって二つの案を印刷に回し、最終的に片方を抜き取ったのですが、抜き取り切れていない乱丁版が残ってしまったという訳です。

鳥代：このアリアを使って初演されたと思われるけれど、楽譜は残っていないのね。

2.3 1779.12.26 ミラーノでの初演は失敗、再演ではビアンキのアリアを流用して成功

犬輔：フリーマンによれば、ミラーノにおけるマルケージの活動を音楽評論家のクリスティアン・フリードリッヒ・クラマー Christian Friedrich Cramer (1752-1807) が (1784 年になってからですが) 次のように報告しているといひます。「彼はカーニヴァル中にミラーノの劇場で主役を 2 回歌った。最初のオペラは 1780 [のカーニヴァル] に上演され、二つ目は 1782 に上演された。1 年目に彼は半狂乱の精神錯乱を引き起こした。しかし、2 年目はおそらく彼の頑固さのために、最初のオペラで聴衆をあまり喜ばせませなかったが、二つ目では喜ばせた。1 年目のカーニヴァル・シーズンは短かったため、ボヘミアの作曲家ミスリヴィチェク氏 [ママ] による《アルミーダ》というオペラだけが上演された。音楽はうまくいかず、歌手は自分たちの裁量に従って、他の作曲家によるアリアに置き換える必要があると考えた。マルケージは第 2 幕にロンド「わが希望の君よ、私は苦しみたい Mia speranza, io pur vorrei」を挿入した。これは、比類のない大聖堂カペルマイスターのサルティによって、前の年の秋にフィレンツェで行われた別のオペラで彼のために設定されたものであった。同じく第 3 幕にクレモナーのカペルマイスター、ビアンキ [による《カストーレとポルーチェ》(フィレンツェ 1779 秋)] ¹⁴ のメヌエット「あなたが泣き、苦しむなら Se piangi, e peni」が挿入された。これらの作品で、彼は特にロンドで並外れた熱意をかき立てたが、ミスリヴィチェク [ママ] の作品の他のブラヴァー・アリアからも同様の評価を得た」。



あなたが泣き、苦しむなら、
私はあえぎ、ため息をつきます：
私があなたを幸せと感ずるなら、
私は死ぬことを誇りに思いません。
ああ、私の人生よ、
その泣き声と嘆きをやめて、
苦しみと殉教を
私にお与えください。

鳥代：《アルミーダ》の初演 (1779.12.26) は失敗で、その対応策の一つとして再演では「私にとって、いとしい人から Per me lontano の代わりにジュゼッペ・フランチェスコ・ビアンキ Giuseppe Francesco Bianchi (1752-1810) の「あなたが泣き、苦しむなら Se piangi, e peni」が歌われたということですね。この選曲にはマルケージが大きくかかわっていたことは間違いありません。



ビアンキ

教授：フリーマンは失敗の理由として別の解釈をしている。「印刷された台本に見られる謎のテキスト“私にとって、いとしい人から Per me lontano”は、元のテキスト“あなたが泣き、苦しむなら Se piangi, e peni”の代わりにビアンキのアリアの音楽に合わせて歌われることを意図していたことはほぼ確実です。目の前の演劇的なアクションに、より適しているからです」と述べている。すなわちマルケージの要求は元々ビアンキのアリアを挿入したいという具体的要求であって、劇場側はそれなら歌詞だけでもリブレットに合わせて“替え歌”にしてほしいと言ったということになるだろうか。

犬輔：それはおかしいですよ。初演が失敗したことの原因が音楽ではなく、歌詞だけにあるということになります。

教授：フリーマンが「現代の音楽評論家にとって、ミスリヴェチェクのアリアがスカラ座の聴衆の支持をほとんど得られなかったのに、ビアンキのアリアがこれほどまでに認められた理由を理解するのは困難です」と言うところの“ミスリヴェチェクのアリア”の楽譜が何を指すのか不明であって、もし「私の愛する人よ Il caro mio bene」をここで指すのなら混乱しているね。

鳥代：フリーマンは「リスボンのアジューダ図書館のほかに現存する《アルミーダ》の唯一のオペラ・スコアは、パリ国立図書館の音楽コレクション^{注 15}に保存されていますが、第 3 幕の開始近くにはアリアがまったく指定されておらず、一連の空白頁のみがある不完全なドラフトです」と言っています。パリ国立図書館のスコアがまさにビアンキのアリアが使われたという再演時のスコアの流れを共有しているのではないのでしょうか。

2.4 他人のアリアではなく自前のアリア「私の愛する人よ Il caro mio bene」を作曲する

犬輔：ミスリヴェチェクは緊急避難的にビアンキの曲を使うことに同意したとしても、恒久的には自作を作曲して挽回することを狙ったに違いありません。そしてその成果が「私の愛する人よ Il caro mio bene」だったのではないのでしょうか。既述の通りこの年のカーニヴァルでは第 2 オペラが上演されなかったということですから《アルミーダ》の上演期間は長くなっており、差し替えアリアが再々演に間に合ったものと考えられます。

Il caro mio bene Attendo, sospiro, Ne quanto qui miro Conforto mi dà. San l'aura, san l'onde L'acerbe mie pene, Ne sò chi m'asconde L'amata, pietà!	私の愛する人よ 私はあなたを待ち、ため息をつく、 ここで私が求めるものは 私に慰めを与えてくれるもの。 順風よ、好調の波よ 私は苦い苦しみにいる。 私は知っている、誰が私から 最愛の人を隠したのか。同情を！
--	--

鳥代：再々演は記録されていませんが成功だったものと思われます。何故かという、この旋律がマルケージのお気に入りとなったであろうことを裏付ける発見をモンタナリが報告しているからです。「ヨンメッリの甥としてヨンメッリーノの名で知られているガエターノ・アンドレオツツィ Gaetano Andreozzi (1755-1826) によって [ママ] 書かれた《アンジェリカとメドーロ Angelica e Medoro》(ヴェネツィア 1791) に挿入されたアリア“帆を上げよ Spiegate le vele”がミュンヘン州立図書館に保存されており、その音楽は、実質的に“私の愛する人よ Il caro mio bene”と同じです。不思議なことに、第 2 節はありませんが」とあります。アリアの表紙には「ルイージ・マルケージにより演奏」と書かれています（アンドレオツツィではなくベルトーニの作品の可能性が高い。右図はベルトーニのリブレットです）^{注 16}。

Spiegate le vele,
Già l'aura c'invita:
La calma gradita
Si vada a goder.

帆を上げよ、
すでにそよ風が私たちを誘う：
歓迎の静けさを
楽しみに行こう。

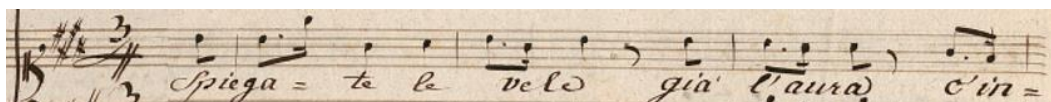


図 7 アンドレオツツィ (?) のアリア「帆を上げよ Spiegate le vele」(ミュンヘン州立図書館蔵)

犬輔：モンタナリは上記のことから、アリア「私の愛する人よ Il caro mio bene」の筆写譜がリュールベック (ホ長調)、プラハ (ヘ長調)、モンテカッシーノ (ヘ長調) の図書館にあることは「ルイージ・マルケージがこのメロディを好み、彼の“鞆のアリア aria di baule”として挿入する習慣があった」ことを裏付けると述べています。また複数の筆写譜があることは単独曲としての普及を意味することでもあります。

教授：マルケージは 1779/80 から 1791 まで 10 年以上も同じメロディを使い回ししていることになり、余程気に入っていたものとみえる。これはモーツァルトがこのメロディを編曲した経緯を調べるための重要なヒントとなるね。

2.5 アリア「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」 K.152 の歌詞の出典はどこから

鳥代：「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」 K.152 の歌詞の出典について、フリーマンは「テキストの作者は不明」としていますが、モンタナリが音楽祝宴劇 *festa teatrale* 《平和の勝利 *Il trionfo della pace*》（トリノ 1782）の第 2 部最終場にアリア「静けさはほほえみつつ *Ridente la calma*」があり、しかもマルケージが歌っていることを突き止めたのです。リブレッティストはチェーザレ・オリヴィエリ *Cesare Olivieri*（活動期間 1776 – 1791）です¹⁷。

教授：これは大変な発見だ。

犬輔：へー、この音楽祝宴劇の作曲者はビアンキなんですね。でもアリアのメロディは今まで見てきたどれとも異なっている¹⁸。

鳥代：音楽祝宴劇《平和の勝利》の粗筋を紹介しておきます。「メディアのチアッサーレ王は、リディアのクレソ王とその同盟の国々に包囲されたため、ペルシャに応援を求め、ペルシャの王子チロと共に戦いに臨んだ。インドからの使者に調停を提案されるも拒否し、インドも敵に回す。戦況はチロが卓越性を示し、クレソ王を捕虜にした後、彼を殺そうとした。ところが突然の悪天候は、捕虜の王のためにすでに点火されていた処刑の薪の炎を消した。この出来事に驚いたチロは彼の命と王国を返すことにした」。

犬輔：悲劇への傾斜を漠然と幸せな光景へと置き換えるために第 2 部最終場に平和の神が導入されたんだね。最終場を終わりまで訳してみましょう。

SECONDA PARTE SCENA ULTIMA	第 2 部 最終場
<i>Al suono di una dolce melodia scendono le nubi, le quali precedente uno scopio di tuono s'aprono, comparisce l'iride, e quindi la Pace coronata d'olivo, correcciata da'suoi Geni, e caratterizzata col Caduceo, ed altri emblemi allegorici.</i>	優美なメロディに合わせて垂れ籠めた雲が切れると、雷鳴が轟き、虹が現れる。そして、神性によって調えられ、カドゥケウス〔聖なる杖〕やその他の寓意的なエンブレムで特徴付けられた平和の神が、オリーブの枝を冠して現れる。
CIASSARE	チアッサーレ
Ah qual portando!	ああ、何を予言できよう！
CIRO	チロ
Stelle, che miro! E quale Improvviso splendore Mi lega i sensi!	運命の神よ、なんて素晴らしい光景だろう！ 突然の素晴らしさが 私の感覚を縛ります！
LA PACE	平和の神
Incrudelir sui vinti, Ciro, gloria non è. Dà pace all'Asia; Disciogli i prigionier. Del tuo valore, Ch'è pur dono del Ciel, coll' altrui sangue Non abusarti, e alfin ti fia palese, (<i>all cenno di Ciro partono alcune Comparses.</i>) Che del nome d'Eroe fra i Nimi è degno Chi sa fiorir, non chi distrugge un Regno.	チロよ、敗者への残虐行為に 栄光はありません。アジアに平和を。 囚人を解放し、 天から授かったあなたの勇気を 人の血で乱用しないように。 (チロの合図で何人かの端役が立ち去る) 王国を滅ぼす者ではなく、繁栄する方法を 知っている者にふさわしいように。
CIRO	チロ
Sì, bella Pace, io già del tuo gran Nume Mi sento il cor ripieno. Ah vieni, o Creso. E di que' lacci indegni Ola si tolga il peso. Araspe, e i suoi Abbiano libertade. A' nostri sdegni Saldo nodo di pace alfin succeda; E il Mondo uniti in amistà ne veda.	はい、美しい平和よ、私はすでにあなたの偉大な神性で満たされています。ああ、来なさい、クレソ。さあ、無用な鎖を外します。アラスペ、あなたには自由があります。私たちには、平和の確固たる絆が生じるでしょう。そして、友情で結ばれた世界がそれを見られますように。
CRESO	クレソ
Qual cangiamento!	なんという変化だ！
CIASSARE	チアッサーレ
Oggi l'esempio tuo Sprona la mia virtude. Ad Artenice Rendo sudditi, e Regno.	今日、あなたの模範は私の美德に 拍車をかけます。私はアルテニーチェに 臣民を作って君臨します。
ARIENE	アリエーネ [チアッサーレ王の娘、チロの恋人]
Oh me felice!	ああ、幸せなこと！
CIRO	チロ
Con auspici sì fausti accenda Imene Per noi, mia vita, alfine la bella face, Che tanto sospirai. Già lieto io sono Se oggi col mio perdono Io servo, amata Sposa, al tuo desio, Alla mia gloria, ai Numi, all'amor mio.	私の生き甲斐よ、天から授かった勇気で 婚姻の神に美しい顔を照らしてもらい、 私はため息をつきました。最愛の花嫁よ、 あなたの望みに、私の栄光に、神々に、 私の愛に、今日許しを持って仕えることが できれば、私はすでに幸せです。

Ridente la calma Nell'alma si desti; Nè resti più segno Di sdegno e timor. Tu vieni, frattanto, A stringer mio bene, Le dolci catene Sì grate al mio cor. ARIENE Il guerriero valor come più grande Agl'occhi altrui riluce Se ha la cleenza, e la virtù per duce. CIRO Di ricche spoglie adorno Da noi sacro alla Pace ergasi un Tempio. Che sia di sì gran giorno A'di futuri un memorando esempio. CORO TUTTI Sorga sempre più lieto dall'onde Sopra questo felice Emisfero Di contenti, di gioie foriero Un sì grande, e sì lucido dì. Poi la Fama con fulgide note Alle genri, all'età più remote Tra suoi fasti l'additi così. FINE	静けさがほほえんで 魂が目覚めます。 もはや消え去るのは 憤りや恐れのみ。 そうこうするうちに、いとしい人よ あなたは私を抱擁しに来る その優しい締め付けは 私の心にはとても嬉しい。 アリエーネ 指導者としての慈悲と美徳があれば、 戦士の勇敢さは 人から見ても輝きます。 チロ 私たちによって飾られた平和への神聖で 豊かな戦利品で神殿が建てられました。 記憶に残る例が将来のこのような 素晴らしい日にありますように。 合唱 全員 満足と喜びの この幸せな半球 [ヨーロッパ、アジア] 上の波から、 ますます喜びに満ちて立ち上るような、 偉大で明快な日の前兆となりますように。 そして名声は人々に輝かしい調子を与え、 その栄光の中で 最も遠い時代にそれを実現します。 終わり
---	--

鳥代：チロのアリア全般について、フランチェスコ・ブランケッティの解説（2009）を見ておきましょう^{注19}。「チロが間違いなく物語の主人公であり、スコアの支配者であることを、歌手の名前から期待するのは論理的です。その名はルイージ・マルケージ、世紀の最後の偉大なカストラートの一人です。彼の 4 つのアリアのうち、王子が戦闘に参加する準備をしているときに歌う出撃のアリアだけが完全に戦士の美徳に専念しています（そして実際、ヒーローはすぐにその場を離れ、衝突を考慮して自分の兵士たちを編成するために走ります）。求められる演奏効果は驚くべきものです。偉大なブラヴーラ・アリアに典型的な 5 部構成の枠組みの中で、一方の端から他方の端へ約 2.5 オクターヴの音域（d から g''）をカバーする一連のヴィルトゥオーゾ・パッセージ（発声、音階、音域の跳躍）を目の当たりにします。二つのテンポ・ディ・メヌエット（3/8）のアリア、一つは第 1 部の途中に、もう一つはドラマの終わりに向かって、打って変わって勇敢で愛情深い顔を見せてくれます。2 番目の「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」では、楽譜にメヌエット・ディ・チーロと明示的に書かれていることがわかります。実際、この曲には、メヌエットのリズムに加えて、楽器のメヌエットの 3 部構成もあります」。

教授：ところで、イタリア、ファエンツァのマンフレディアーナ図書館にはジュゼッペ・サルティのアリア「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」がある。これについて調べなさい。

犬輔：はい。RISM^{注20}のインチピットによればピアノのメロディ、リズムとはさらに異なっています。出典はサルティ音楽祝宴劇《平和の勝利》（マントヴァ 1783）ですがこちらにマルケージは出演していません^{注21}。

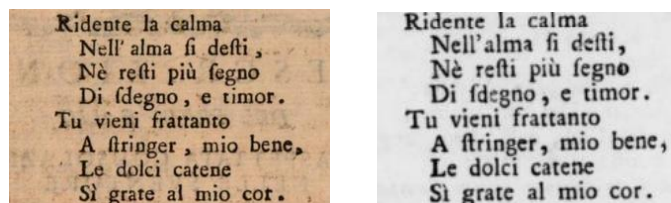


図8 アリア「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」（左：ピアノ用、右：サルティ用）

教授：これでモーツァルトの K.152 の作曲（編曲）は 1782 以後となることが確実だね。

2.6 アリア「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」K.152 編曲の経緯

鳥代：K.152 は作曲ではなくて編曲だということで今回進めてきましたが、じっさいにはそれ以上に「替え歌」なのではないでしょうか。既存のメロディに既存の別の歌詞を乗せ、替え歌にした上で、オーケストラ伴奏をクラヴィーア伴奏に編曲した作品ということになります。

犬輔：替え歌の是非を論じましょう。

表 1 替え歌の歌詞比較

歌詞	訳詞	備考
Il / ca / ro / mio / be / ne At / ten / do, / sos / pi / ro, Ne / quan / to / qui / mi / ro Con / for / to / mi / dà . San / l'au / ra, / san / l'on / de L'a / cer / be / mie / pe / ne, Ne / so / chi / m'as / con / de L'a / ma / ta, / pie / tà!	私の愛する人よ 私はあなたを待ち、ため息をつく、 ここで私が求めるものは 私に慰めを与えてくれるもの。 順風よ、好調の波よ 私は苦い苦しみにいる。 私は知っている、誰が私から 最愛の人を隠したのか。同情を！	6 音節 8 行詩
Ri / den / te / la / cal / ma Nel / l'al / ma / si / des / ti; Né / res / ti / più / se / gno Di / sde / gno e / ti / mor . Tu / vie / ni, / frat / tan / to, A / strin / ger / mio / be / ne, Le / dol / ce / ca / te / ne Si / gra / te al / mio / cor .	静けさがほほえんで 魂が目覚めます。 もはや消え去るのは 憤りや恐れのみ。 そうこうするうちに、いとし人よ あなたは私を抱擁しに来る その優しい締め付けは 私の心にはとても嬉しい。	6 音節 8 行詩

両方とも 6 音節 8 行詩ですので歌詞を取り変えてもそのまま曲に乗ります。ただ、前者はいとしの人が面前にいないので歌詞は独り言であり、後者はいとしの人を面前にしているため歌詞は呼び掛けになっています。

鳥代：オペラから独立して歌う場合、いとしの人が面前にいない状況で後者の歌詞を歌うこともできます。そうすることで（替え歌にするしないにかかわらず）むしろ、より空想が高まりイメージがレベルアップするのではないのでしょうか。

犬輔：替え歌にすると、さらに歌詞と音楽のヘテロジニアス（異種混合）な効果も期待されるね。

教授：諸君たちが替え歌の是非を論じている裏には、モーツァルトが替え歌にしたという前提が見え隠れしているが、モンタナリはそう考えてはいない。マルケージ自身がピアノの音楽祝宴劇《平和の勝利 Il trionfo della pace》（トリノ 1782）の上演で、アリア「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」の音楽が気に入らず、「靴のアリア」であるミスリヴェチェクの「私の愛する人よ Il caro mio bene」の曲にリブレットの「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」の歌詞を乗せた“替え歌”で歌ったという説なのだ。

鳥代：随分大胆な説ね。単独曲なら替え歌もありうるけれど、オペラのアリアではシチュエーションに合わせて音楽が書かれているから安易な替え歌は感心できないわ。

犬輔：ばくもそう思います。前述のブランケッティの説明でピアノの「曲にはメヌエットのリズムに加えて、楽器のメヌエットの 3 部構成もあります」とあるように、特にこの場合はシチュエーションにぴったりの曲となっていることでもあり、マルケージが“靴のアリア”の音楽による替え歌を自分の好みで採用したとは考えにくいことです。

教授：それではモーツァルトがいつどこでミスリヴェチェクの曲およびオリヴィエリの歌詞を入手し、何のために編曲したのか、議論したまえ。

鳥代：編曲の時期が 1782 以降ということですが、ミスリヴェチェクはすでに 1781 に亡くなっていますからミスリヴェチェクが直接かかわった可能性はありません。そもそも、それ以前に両者の関係は切れてしまっていました。ザルツブルクで留守番していたレーオポルトの 1778.8.13 付け手紙を引用しましょう。「ミスリヴェチェクのおかげで、私は郵便代をほんとにたくさん払わせられました。しかも手紙という手紙で、お前へのナポリの委嘱状は間違いはなく、確実で、決定的で、信用がおけると言っていました。私が彼のために 37 ドゥカーテンをもらう手助けをしてやったあと、彼は復活祭前にはもうミュンヘンを引き払いました。——それに今ではもうひと言の挨拶もありません」。つまり、ミスリヴェチェクがザルツブルク宮廷のために書いた作品の報酬を得るために、レーオポルトは手を貸したのに、ミスリヴェチェクはヴォルフガングがナポリの宮廷と契約するための援助を本気でしてくれていないというのです。この手紙のあと、モーツァルト父子の手紙にミスリヴェチェクが言及されることは二度とありませんでした。

犬輔：音楽的には多大な影響を受けたけど、実務的な助けを得られなかったことにレーオポルトは苛立ったのですが、モーツァルト本人は父親に従わざるを得なかったとはいえ、ミスリヴェチェクをオペラ・セーリアの師と仰いでいたことは疑いのないことです。

教授：モーツァルトとマルケージとの関係はその頃どうだっただろう。

犬輔：サルティの《ジュリオ・サビーノ》が 1785.8.4 にヴィーンで上演されました。マルケージはエカテリーナ女帝からロシアに招かれており、その道中ヴィーンに逗留するのに合わせてヨーゼフ皇帝自らマルケージやサリエリと相談して制作をオーガナイズしたといいます。マルケージがタイトル・ロールを、カヴァリエーリがサビーノの妻エッポニーナを、そしてテノールのアーダム・ローラーがティートを歌ったそうです²²。

鳥代：モーツァルトがこの上演に参席していたかどうかの記録はありません。でも旧知のマルケージに会ってはいたのではないのでしょうか。この機会に“鞆のアリア”であるミスリヴェチェックのアリア「私の愛する人よ Il caro mio bene」を聴いたものと思います。ここで二人の共通の友人であったミスリヴェチェックを偲んでモーツァルトは、人手のかかるオーケストラ伴奏でなく、身軽なクラヴィア伴奏でマルケージが“鞆のアリア”を歌えるようにと K.152 を“ポータブルな鞆のアリア”として提供したのではないのでしょうか（ゆえにサン＝フォワのカンツォネッタの呼称も捨て難い）。歌詞を替え歌にしたのは、そうすることで「あなた」をミスリヴェチェックに準えることができたからでしょう。

3. まとめ

犬輔：フリーマンは「ミスリヴェチェックの作品の成果は、ヨハン・クリスチャン・バッハやボッケリーニが作曲したどの音楽にも匹敵するか、それよりも優れていますが、ハイドンやモーツァルトの成熟した作品と比べると、通常、息切れ、展開の範囲の限界、テーマ素材の個性の少なさに悩まされています」と述べています。ぼくたちもモーツァルトとミスリヴェチェックの音楽は非常によく似ていながらも、どちらの曲か区別がつかず。その理由が何故かとずっと考えていたんですが、フリーマンのこの指摘を聞いてなるほどと思いました。

鳥代：その二人の音楽がミックスしたところに K.152 があり、両方の長所が出てきていると評価できるわね。つまり聴いてみてどちらの作曲か区別がつかないのですから。

教授：諸君たちの結論をまとめると、アリア「静けさはほほえみつつ Ridente la calma」K.152 の作詞はチェーザレ・オリヴィエリ、原曲はミスリヴェチェックのアリア「私の愛する人よ Il caro mio bene」であり、モーツァルトはルイージ・マルケージのためにクラヴィア伴奏用に大譜表で編曲した。時期は 1785.8 頃、場所はヴィーンということだね。今回は、ミスリヴェチェック、マルケージ、モーツァルトの友情が生み出した作品として K.152 を見てきたが、この曲に触発され、さらに編曲した人がいる。ヨゼフ・アントーン・ズルツァー Josef Anton Sulzer (1778-1854) で、「イエスの甘い思い出」へ長調という曲である^{注 23}。



今後も K.152 の純粹さとシンプルさは多くの人々を魅了させ続けるに違いない。

注 1：1779.2.25 のコンスタンツェから B&H 社宛ての手紙（抜粋）：「この手紙の最後に曲のリストがあります。私のために作ったコントラダンスをソナタとして使うことができます。しかし、これらとカドリールには 8 ドゥカーテンが必要です。（以下リスト）K.433, K.468, K.539, K.307, K.392, K.437, K.520, K.390, K.520, K.308, K.393, K.530, K.621 三重唱草稿（該当不明）, K.152, K.475a, K.440, K.517, K.472, K.474, K.518, K.531, 多数のコントラダンス&カドリール（該当不明）, 3 つの「尻を舐めろ」カノン [K.231, K.233, K.234]。（以下文章）もう一度これらカノンを送ります。しかし、テキストが省略されているため、変更する必要があります」。なお、最初の 16 曲には単価 2 ドゥカーテンの価格が付けられている。

注 2：Oeuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart, vol. 5 (Leipzig, 1858)

注 3：Théodore de Wyzewa, Georges de Saint-Foix, W. A. Mozart: sa vie musicale et son oeuvre de l'enfance à la pleine maturité, vol. 2 (Paris, Perrin, 1912), p.263

注 4：BnF D.8205 (12), 歌唱 1、ホルン 2、フルート 2、ヴァイオリン 2、ヴィオラ、バス・コンティヌオのスコア。

注 5：Georges de Saint-Foix, Mozart, d'après Mysliveček, Musique 2

注 6：Ajuda Palace Library, Ms. 45-I-25 e 26

注 7：Biblioteca da Ajuda < <https://bibliotecadaajuda.blogspot.com/2015/05/armida-josef-myslivecek-22-e-23-de.html> >

注 8：Daniel E Freeman, Josef Mysliveček Il Boemo, Calumet Editions, Minneapolis, 2022, pp.339-364. なお「Il caro mio bene」の譜例は 356 頁が間違っていて印刷されている。正しい譜例はチェコ語版の 385 頁で見ることができる。

< https://books.google.co.jp/books?id=XCOUEAAQBAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false >

注 9：Paolo V. Montanari, L'invenzione del passato. Note per il concerto "Autenticamente falso" del Festival Pergolesi Spontini 2017

注 10：Sartori 1990 02700. Roma Biblioteca Nazionale Centrale, Collocazione: 35. 5.L.16.04

注 11：CDN-Ttfl: Collocazione: itp pam 00572. I-Bc: Collocazione: Lo.03193.

注 12：『邦訳書簡全集』III, 116 頁

注 13：神戸モーツァルト研究会第 262 回例会

注 14：Sartori 1990 05204

注 15：BnF Ms. D.8196-8

注 16：アリアは RISM 455016174. D-Mbs: Mus.ms. 3653: Nell'Angelica e Medoro // Cavatina // Spiegate le vele // Eseguita das Sig Luigi Marchesi // Nell nobilissimo Taetro in San Benedetto // Il Carnevale 1791 // Del Sig Gaetano Andreozzi. しかしアンドレオツツィのリブレット（マドリッド 1791）にこのアリア無、配役表にマルケージ無、作曲者名有。一方バルトニのリブレット（ヴェネツィア 1791）にこのアリア有、配役表にメドーロ役マルケージ有、作曲者名無。なおアンドレオツツィの妻アンナは両方の配役表でアンジェリカ役である。

注 17：Sartori 1990 23874. リブレットに作者がチェーザレ・オリヴィエリであると明記されている。

注 18：RISM ID no.: 840013545

注 19：Francesco Blanchetti: Francesco Bianchi e Angelo Tarchi autori di feste teatrali per il Teatro Regio di Torino (1782 e 1784), LA FESTA TEATRALE NEL SETTECENTO DALLA CORTE DI VIENNA ALLE CORTI D'ITALIA, Atti del Convegno Internazionale di Studi Reggia di Venaria, 13-14 novembre 2009

注 20：RISM ID no.: 850003200. RISM では出典をサルティのオペラ《認められたチロ Ciro riconosciuto》（コペンハーゲン 1754）としているが間違い。

注 21：Sartori 1990 23875

注 22：神戸モーツァルト研究会第 262 回例会

注 23：RISM ID no.: 400108362

（作成：2023 年 1 月 27 日、改訂：2023 年 2 月 24 日）